

「予防教育」の実際と可能性

山崎 勝之

鳴門教育大学予防教育科学センター所長

第6回 —— 予防教育の実際② 流行の感情教育とは一線を画する

今回は、「感情の理解と対処の育成」の教育で実際の授業を紹介しよう。近年、感情の機能は多方面で注目され、感情の健全な育成も学校でちらほら始まり出した。

しかし、予防教育の感情の授業とは何かが違う。それは、目標の構成の違いでもあるが、やはり授業への引きつけの格が違う。見てみよう。

1 感情知能の流行の功罪

心理学の研究界では、感情の機能が脚光を浴びている。注意や認知、学習や記憶、健康、社会行動、さらには臨床技法に至るまで感情の役割が幅をきかす。

近年、感情の重要性を世に広めたのは、サイエンス・ライター、ゴールマンによる著作「感情的知能」であろう。知能指数 (IQ: Intelligence Quotient) に感情指数 (EQ: Emotional Quotient) の概念を対峙させ、その対峙の妙やEQの教育可能性が人心をとらえた。なお、EQ関係ではemotionに「情動」という訳

語が使用されるが、本連載での使い分けでは、意識可能な内容が多いことから訳語は「感情」になる(本年5月号参照)。

本来の感情的知能の構成は、簡単に言えば、感情に気づき、理解し、制御することになる。これらの機能に問題が出ると、私たちの適応を根こそぎ奪ってしまいかねない力が感情にはある。ところがゴールマンは、感情的知能の構成に、自己効力感、共感性、道徳性などありとあらゆるポジティブな側面を入れ込んでしまった。ここから、感情的知能の定義の曖昧さが拡大し、その育成も何をやっているのかわからない混乱を呈し始めた。

それにこの感情的知能には、情動がもつ無意識性や身体性が欠落している。このような問題を一切合切修復して行うのが、「感情の理解と対処の育成」である。

2 無意識から意識、情動から感情へ

予防教育の授業では、感情の教育に限らず、情動や感情の動きを中核に据える。少しおさらいをしておこう。見て、理解して、考え、判断して、振る舞うことは、生じたときは意識できない身体的な反応である情動によってコントロールされていた。情動がまとまって強く起こったときは意識に上り、特定の名称(悲しい、怒ったなど)でもって呼べる感情になる。思考や判断などの高次の心の動きも情動や感情のガソリンが注入され機能する。

そこで予防教育は、情動と感情をたっぷりと喚起した中、学習対象としての認知、思考、行動をたたき込む。つまり、情動と感情に抱かれるように高次な心的特性の学びが行われ、この感情に関連した教育のもっとも大切なところは、予防教育全体を貫いて実行される。これに加えて、「感情の理解と対処の育成」では、情動や感情に気づき、理解し、対処する学習が練り上げられる。

3 座席配置の重要性ならびに授業者の基本的態度と技能

前回は十分にふれることができなかったので、今回ふれておこう。それは、座席配置と授業者の基本的な授業態度のことである。

予防教育では、授業を行う教室環境を整えることを重視する。美化や整頓は当然のことであるが、何よりも小グループの構成が大切になる(図1)。予防教育の授業は小グループの活動が要になるので、円滑に活動が進むメンバー構成とする。

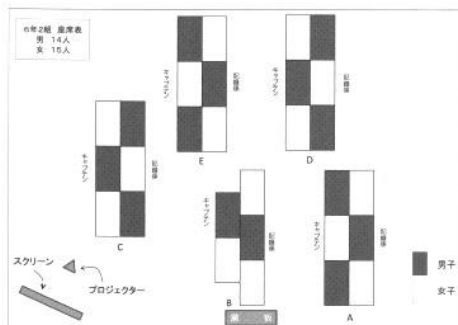


図1. 座席表例

表1. 予防教育における授業者の基本的態度と技能

基本的態度

- ① 知識を授けるだけでは子どもは変わらないことに留意する。
- ② 子どもは、本来自分で正しく伸びていく力を持っているという視点を重視する。
- ③ 賞罰の危険性と与えるときの注意点を熟知する。
- ④ 内発的動機づけを重視する。
- ⑤ 子ども同士の交わりや助け合いを多用する。
- ⑥ 個人差は大きく、その個人差を考慮した働きかけをする。

基本的技能

- ① 授業時の発話は最低限にして、しかも簡潔にテンポ良く。授業ではリズムとテンポを保つことが重要になる。
- ② 軽く話すことをベースとし、緩急、強弱を織り交ぜ、子どもの注意を常に引きつける。
- ③ 子ども目線に立ち、子どもと同じように授業を楽しむ。
- ④ 一斉に声を出させる、一斉に同じ動作をさせるなど、子どもの声と身体に躍動感ある動きを取り入れる(小学校では重視)。



イラスト1. 導入アニメ・ストーリーの1コマ

話がこうだ。国民の気持ちを理解できなくなり不信感を募らせた女王が氷の城に閉じこもり、国は冷え切り活気がなくなった。そこで動物の家来たちは、女王に国民の気持ちを、国民に女王の気持ちを理解させる勇者を探す旅に出る。その第2話は、一角に見とれていた勇者たちが、家来の

グループには日替わりのキャプテンや記録係も置かれ、男女交互に並ぶなど座席配置のルールが詳細に決められている(予防教育科学センターに座席決定のルールを説明した冊子がある)。

さらに大切なことは、授業者の態度だ。予防教育では、子どもの情動や感情をかき立て常に子どもを引きつける必要がある、また子どもが自ら伸びていくことを尊重する。このため、表1に示したような授業者の

基本的態度や技能を強調する。この態度や技能は予防教育に限らず、学校での授業や教育では必須のものになろう。

4 教育の実際 再びライブ版

さて、前回は3年生の授業紹介であったが、今回は小学校の最高学年6年から「感情の理解と対処の育成」の2時間目を紹介しよう。再びライブ版が入る。

③ 導入アニメ・ストーリー 導入アニメ・ストーリーが始まった(イラスト1)。小3とは違って、大人向けに豹変している。小6ともなると大人でも見入ってしまうストーリーと映像、それに音響だ。すべて著作権フリーというから驚きだ。



写真1. 黒板のシートに貼り付けられた、最近気づいた気持ち

あしかから「人間はどんな気持ちを感じ、その気持ちにどう気づくのか」と問いかけられる。さあ、問いに答える授業が始まる。

④ 活動助走 後の活動クワイマックスの準備が始まる。最近、友だちや周りの人がどんな気持ちを感じていたのか、手元の付箋に書き、黒板のシートに貼り出す(写真1)。

貼り終わったシートを見て授業者は簡単に特徴を伝え、4つの気持ちを巧みに取り出し、大きめの長方形の4色画用紙にそれぞれ書き出す。この4つの気持ちは、後に出る気持ち

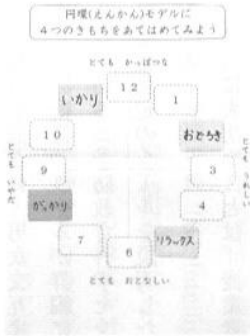


写真2. 円環モデルと貼り付けられた気持ちカード

ちの円環モデルの4つの象限から1つずつ抽出される(4つの例は写真2参照)。書き出された気持ちを各グループは、手元の小判の同じ4色カードに書き写す。裏にはマグネツト付きだ。

⑤ 活動クワイマックス さて準備が整い、気持ちの円環モデルが取り出される。おっと、心理学でも最新のモデルだ。正負感情次元と活性・不活性次元の2次元平面に、気持ちを位置づける指令が出た。専門家でもむずかしいのに、できるのか。子どもたちは学者気分だ。

どのグループも顔を寄せて喧々譁々の意見交換。完成したグループから円環モデルが張り出される(写

真2)。授業者は、張り出された円環モデルを比較しながら説明し、同じ結果が1枚もないことに驚く。さすが次の作業が続く。張り出された円環モデルを見て質問したいグループを決め、質問を考える。自分たちのグループとは違う貼り方にはどうしても質問を入れたい。

質問と回答の時間が来て、ゲームの登場。第1問のスライドから、「太陽と地球はどちらが熱い?」。他愛もない問題だが、スライド上に問題がじらすように出てくるのがよい。分かったグループは一斉に「はい。分かった」と叫んで手を挙げ立つ。

息も吐かず授業者が質問グループを当てる。待つてましたと、他のグループへ貼り方の質問。貼り付けを考えているときもそうだったが、質問から回答の段階でも強烈な思考の動きが見てとれる。ゲームはグループ対抗だが、途中ダブルポイントチャンスも入り、飽きさせない。最後は、きわめつけのチェンジタイム。これまでの経緯から貼り方を変

えたいグループは前へ。我先に前に出るグループの山。思考がゆさぶられ、どんどん深みへ入る。

⑥ シェアリング、インセンティブ質問 活動が終わると、シェアリングに続いてインセンティブ質問が挿入される。「Aという国の人たちは、うれしいいきもちになると怒った顔をします。Bという国の人たちは、いかりの気持ちになると笑った顔をします。一生住まなければならいとしたら、どちらの国を選びますか。」「えーっ!?!」、戸惑いの声。10秒足らずで選ばせ、その理由を聞く。正答などない質問だ。授業者の「考え続けてくださいね」という冷めた言葉とは裏腹に、授業の記憶はここでも熱く定着される。

後は、終結アニメ・ストーリー、授業進行ディスプレイ、まとめの言葉と授業の型に沿って続く。6年生でも身体や声を使い、情動や感情の喚起たっぷりだが、次第に考えることの重みが増えて来た。発達差を考慮した、心憎い授業構成である。